

周手術期実習における学生の手術に対するイメージの変化

吉井 美穂¹, 八塚 美樹¹, 安田 智美¹,
木本 久子², 亀谷 由美², 田澤 賢次¹

¹富山医科薬科大学医学部看護学科成人看護学2

²富山医科薬科大学附属病院

要 旨

私たちは、了解の得られた看護学科4年次生60名を対象にSD法（形容詞23対）を用いて成人看護学（急性期）実習前後の手術に関するイメージ調査をおこなった。実習前の手術に関するイメージは、「清潔な」「特色のある」「激しい」「固い」「はりつめた感じ」「男性的な」「ちから強い」「変化に富んだ」「特色のある」「テンポの速い」「せわしない」「動的」「クールな」「不安定な」であった。

実習前に比べて、「楽しみである－憂うつである」「好き－嫌い」「明るい－暗い」「親しみやすい－親しみにくい」「のどかな－緊迫した」「激しい－穏やかな」「はりつめた－ゆったりした」「生き生きした－生氣のない」「和やかな－とげとげした」の9項目で差が見られた。

イメージは、ある対象に対するその人の過去経験や感情の評価などの心的過程のはたらきの総体を反映し、否定的なイメージは、消極的や無気力な行動を生み、肯定的なイメージは、積極的行動を生み出すと考えられる。今回調査した結果、手術に関する肯定的なイメージへ変化しており、学生の実習態度の向上に少なからず効果的に作用するものと考えられた。

キーワード

SD法, イメージ変化, 成人看護学実習, 手術

はじめに

人口動態や疾病構造の変化、医療の高度化、保険システムの改革など看護を取り巻く社会環境は変化し続けている。看護基礎教育においても、このような保健医療情勢に即して質の高い看護実践能力の育成を目指しているが、臨地実習における教育活動には、多くの課題が指摘されている¹⁻³⁾。とりわけ、成人看護学（急性期）実習は、学習環境の複雑さや患者像の把握が難しいことから、学生にとっても課題が多い。またさらに学生は「手術」という言葉に対し、授業やメディアなどを通して脅威的で緊迫したイメージを抱いている者が

多く、このことも実習を困難にしている一因と考えられる。

本学成人看護学（急性期）実習では、生命の危機的状況や生命の急激な変化が予想される対象を理解し、生命の維持、苦痛の緩和、日常性の回復、社会復帰に向けての看護が実践できる能力を養うことを目的として実習を展開し、受け持ち患者の手術見学を組み込んでいる。

特に手術見学実習では、個別指導による見学目標の明確化、学生指導マニュアルの導入による指導の充実をはかっているが、今回実習前後の手術に関するイメージを調査したので報告する（図1）。

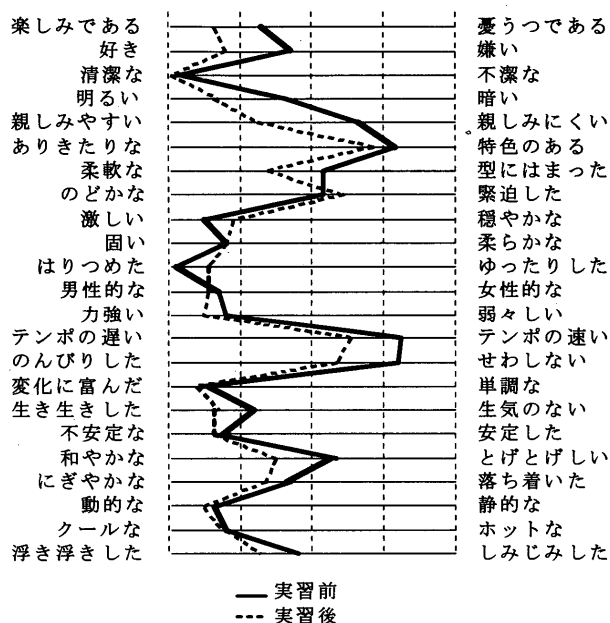


図1 手術室見学実習前後の学生のイメージの変化

研究方法

- 1 調査対象：調査に対し、参加・不参加の自由、不参加の場合でも実習に不利益をこうむることのないことを十分説明の上、協力の得られた本学看護学科4年生60名。
- 2 調査時期：実習開始前と手術見学実習後
- 3 調査内容：看護学生数名に手術及び手術室のイメージを形容詞で自由記載してもらい、さらに文献等から得られた手術のイメージから形容詞対23項目をSD法（5段階）により測定した。
- 4 分析：手術室見学実習前後の各形容詞対の平均値の差をT検定を用いて検定した。

結果と考察

実習前の手術及び手術室のイメージは、特に高得点域は、「清潔な」「特色のある」「激しい」「固い」「はりつめた感じ」「男性的な」「力強い」「変化に富んだ」「特色のある」「テンポの速い」「せわしない」「動的」「クールな」「不安定な」であった。学生は、「激しい」「固い」「はりつめた感じ」から脅威的で緊張感、「テンポの速い」「せわしない」「動的」からは動きの速いイメージしていると考

えられる。「せわしない」というイメージは、単なる動きの速さではなく、どちらかというとな否定的イメージが含まれていると考えられる。

また、手術室・手術は非常に「清潔な」で、「特色ある」とイメージしている。

また、親近性を示す「楽しみである」「好きである」「うきうきする」というイメージは、実習前はどちらでもないに近い点数域であった。

実習後においての高得点領域は、「清潔な」「楽しみである」「好き」「明るい」「激しい」「固い」「はりつめた」「力強い」「変化に富んだ」「生き生きした」「動的な」「クールな」「不安定な」であった。

実習前と比べると、「楽しみである」「好き」「生き生きした」が高得点領域と変化している。また、実習後、「好き-嫌い」「明るい-暗い」「親しみやすい-親しみにくい」「のどかな-緊迫した」「激しい-穏やかな」「はりつめた-ゆったりした」「生き生きした-生氣のない」「和やかな-とげとげした」で実習前に比べて差が見られた。（図1）

これらから、手術室は、どちらかというとな「嫌い」「親しみにくい」とイメージされていたものが、「好き」「親しみやすい」に、「緊迫し、激しく、はりつめた、とげとげした、生氣のない」イメージは、実習前に抱いていたイメージから「のどかな、穏やかな、ゆったり、和やかな、生き生きした」に変化していたと考えられる。

また自由記載の内容から、手術室見学実習前は「冷たい」「びりびりした」から、手術室見学後は、「親切な」「興味のある」「魅力ある」等が記載されていた。

表1 学生が自由記載した手術室に対するイメージ

術前	術後
<ul style="list-style-type: none"> ・冷たい感じ ・ビリビリしている ・機械的な ・特別な空間 ・不安 ・忙しい ・てきぱきした 	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフが親切 ・動きが機敏 ・作業がスムーズ ・安心できる雰囲気

今回の調査から、手術見学実習を経験することで、親近性を示す「好き-嫌い」「明るい-暗い」「親しみやすい-親しみにくい」「生き生きした-生氣のない」のイメージに変化が見られた。このイメージの肯定的変化は、個別指導による手術見学目標の明確化や学生指導マニュアルによるマンツーマン指導による効果が大きいと考えられる。

表2 手術室見学前後で有意差のみられた項目

楽しみである-憂うつである	好き-嫌い
親しみやすい-親しみにくい	明るい-暗い
テンポの遅い-テンポの速い	柔軟な-型にはまった
のんびりした-せわしない	和やかな-とげとげしい
生き生きした-生氣のない	

一般的に手術に伴う患者の身体面の変化は、麻酔や手術侵襲に伴う全身的な生体反応、手術に伴う機能低下、創部痛、多くのライン類の挿入とME機器の使用など病態の理解や管理は複雑であり、その回復経過は早い。また、心理的側面においても、生命の維持・回復を医療者に頼らざるをえない状況下での患者は、不安・緊張を抱え、情緒不安定であることが多い。このような状況にある周手術期患者の全体像を手術前に把握し、さらにその患者の問題点を予測することは困難である。しかしながら、受け持ち患者の手術を見学する目

標をより具体的な形で明確化し、その内容を見学前に手術室担当指導者に報告することで、手術室担当指導者とのラポール形成や情報の共有に役立っている。

さらに、平成13年度新たに学生指導マニュアルによる指導が開始された。このマニュアルは、手術見学実習の目標にそって指導内容を統一することを目的に作成された。学生は、手術見学目標を明確化して見学に臨み、実際の手術見学では、このマニュアルにそって担当指導者からマンツーマンの指導を受けている。このことは、学生、指導者両者にとって目標を共有することにつながり、より効果的な学習環境を提供することができたと考えられる。

SD法 (Semantic differential method) は、Osgoodが人がある状況でどのような行動をとるかは、その状況の「意味」をどのように意識するかによって規定されるという発想から1957年に開発され、社会学、心理学、看護学等で幅広く使用されている⁴⁾。つまりイメージは、ある対象に対するその人の過去経験や感情の評価などの心的過程のはたらしの総体を反映し、その後の行動が規定されるのである⁵⁾。否定的なイメージは、消極的や無気力な行動を生み、肯定的なイメージは、積極的行動を生み出すと考えられる。

臨地実習は、学生が理論を応用する技術や人間

表3 手術見学実習の実習概要

目 標
①手術室を取り巻く環境について述べるができる ②患者・医療従事者・環境に対する感染対策について述べるができる ③手術体位と固定方法が患者に及ぼす影響について述べるができる ④麻酔の種類と作用機序及び使用された麻酔薬・筋弛緩剤の作用を述べるができる ⑤手術中の患者の状態を観察することができる ⑥麻酔覚醒時の患者の状態を観察することができる ⑦術前・術中・術後の看護の継続性について述べるができる
内 容
①オリエンテーション：手術室の構造と機能についてのオリエンテーションをうける。 ②手術見学目標の明確化と報告：術前患者の身体的・心理的状态を把握し、術前及び術中起こりうる問題点を予測して、手術見学目標を明らかにする。手術前日に、手術室担当指導者へ報告を行う。 ③手術見学：手術室学生指導マニュアルを使用し、手術室担当指導者のマンツーマン指導による見学を行う。 ④まとめ：レポートを提出する。

理解を学ぶ専門職の本質を学ぶ機会であるが、同時に複雑性や不確かさ、葛藤や不安定な状況を示す場所でもある。

今回調査した手術に関する肯定的なイメージへの変化は、今後学生に少なからず肯定的に影響するものと考えられる。

まとめ

今回、成人看護学（急性期）実習前後の手術に関するイメージ調査をおこなった。

実習前の手術に関するイメージは、「清潔な」「特色のある」「激しい」「固い」「はりつめた感じ」「男性的な」「ちから強い」「変化に富んだ」「特色のある」「テンポの速い」「せわしない」「動的」「クールな」「不安定な」であった。実習前に比べて、9項目で有意差があり、「嫌い」「親しみにくい」は、「好き」「親しみやすい」に、「緊迫し、激しく、はりつめた、とげとげした、生気のない」は、「のどかな、穏やかな、ゆったり、和やかな、生き生きした」に変化していた。実習前は、手術を脅威として捉えていた傾向があったが、実習後は肯定的イメージに変化していた。

引用文献

- 1) 明石恵子：急性期（周手術期）看護実習の“困難”をどう乗り越えるか。看護展望 26 (11)：17-22, 2001.
- 2) 佐藤まゆみ：成人看護学実習における現状と課題；周手術期患者の看護実習より。Quality Nursing 7 (3)：243-246, 2001.
- 3) 原本久美子：“急性期”の実習を考える。看護展望 25 (12)：70-80, 2000.
- 4) 岩下豊彦：SD法によるイメージの測定その理解と実施の手引き。川島書店、東京、1987.
- 5) 神宮英夫：印象測定の心理学。川島書店、東京、1996.

Study on the nursing students' image-change for the operation during the clinical training.

Miho YOSHII¹⁾, Miki YATSUZUKA¹⁾, Tomomi YASUDA¹⁾,
Hisako KIMOTO²⁾, Yoshimi KAMETANI²⁾, and Kenji TAZAWA²⁾

- 1) Department of Adult Nursing (Acute Stage), Toyama Medical and Pharmaceutical University
- 2) Toyama Medical and Pharmaceutical University Hospital

Abstract

We investigated image-changes of 60 nursing students for the operation before and after clinical training through the analysis of free image-description for the operation room and by the semantic differential method (SDM) in which the students selected each one word in the panel of 23 pairs of antagonistic words. The representative descriptions for the operation room before the training were the "cool", "tension", "mechanical", "special space", "anxiety", "busy" and "prompt". With the lapse of training period, they seemed to confirm the most descriptions except the "anxiety" which changed to the description of "circumstance with safety".

SDM showed that there were significant differences in 9 items between pre- and post-training periods; "pleasure-melancholy", "like-hate", "light-gloomy", "friendly-unfriendly", "peaceful-imminence", "violent-mild", "tense-relax", "vigorous-dull" and "calm-harsh". In all these items, the negative images changed to the positive ones, indicating that the clinical training in the operation room might exhibit educational effect and contribute to establish the attitude as the nursing students.

Key words

semantic differential method image change clinical training operation